

■ 概況

7/23~7/29のNYMEX・WTI先物市場は、41.04~41.60ドルの範囲で推移した。

7月30日は、4~6月期の米国実質国内総生産(GDP)速報値が前年同期比年率32.9%と過去最大の下げ幅となり、大幅反落した。また、トランプ大統領の郵便投票の不正発生を理由とする大統領選延期論も悲観的要素となった。ただ、為替市場のドル安による原油先物の割安感が下支え要因となった。9月限終値は前日比1.35ドル安の39.92ドル。

週末31日は、米国国内産油量の減少やリグ稼働数の減少等を好感して反発した。米国エネルギー情報局は月報で5月の米国産油量を前月比200万b/d減の1000万b/dと報告、また、ペーカーヒューズ社発表の米国稼働石油掘削機は180基と前週比1基減少した。ただ、8月からのOPECプラスの減産緩和や感染再拡大の懸念もあり、上値は重かった。9月限の終値は前日比0.35ドル高の40.27ドル。

週明け8月3日は、この日発表の米中両国における製造業景況指数の改善を好感し、続伸した。ただ、引き続き、OPECプラスの減産緩和や感染再拡大の懸念が下押し要因となっている。9月限終値は前週末比0.74ドル高の41.01ドル。

4日は、翌日発表予定の米国の原油・ガソリン在庫の減少、エネルギー情報局(EIA)の米国政府で検討が始まった追加経済対策への期待感から、3営業日続伸した。また、ペイルートでの大規模爆発で中東地域の地政学リスクも意識された模様。9月限終値は前日比0.69ドル高の41.70ドル。

5日は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、週末の原油在庫が前週末比740万バレル減少と市場予想を大幅に上回る取り崩しとなり、4営業日続伸した。また、

米国非製造業景況感指数の回復、ドル安に伴う原油先物の割安感なども、支援要因となった。9月限の終値は前日比0.49ドル高の42.19ドル。

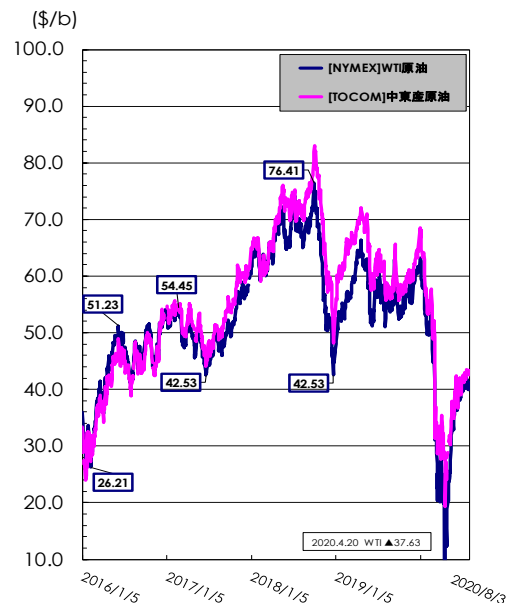
アジアの指標原油である中東産バイ原油/東京市場(9月渡し)は7月23日~29日の間43.00~43.60ドルの範囲で推移した。7月30日43.40ドル、31日43.20ドル、8月3日42.50ドル、4日43.10ドル、5日43.60ドルと推移した。

為替は7月23日~29日の間105.14~105.82円の範囲で推移した。7月30日105.09円、31日104.60円、8月3日106.13円、4日106.13円、5日105.61円で推移した。

財務省が7月30日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、7月上旬の原油輸入平均CIF価格は、20,236円/klで、前旬比2,850円高、ドル建て30.06ドルで前旬比4.36ドル高、為替レートは1ドル/107.02円。

そのような中で、8月3日時点の小売価格は、ガソリンが前週比2.2円の値上がり、軽油は同2.1円の値上がり、灯油も同28円(18%ベース)の値上がりだった。ガソリンは12週連続の値上がり、軽油は2週ぶりの値上がり、灯油も2週ぶりの値上がりであった。この週(8月第1週)の原油コストは値下がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社前週比1.0円引き下げた。

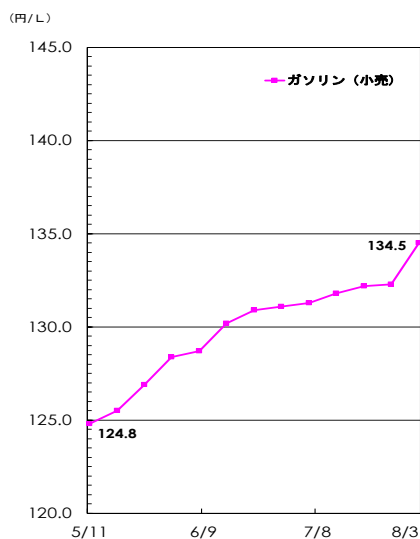
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/26 ~ 8/1	2,260 ▼ -97	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	57.7 ▼ -2.5	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	8/1	13,466 ▲ 371	▲ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	8/3	42.56 ▼ -0.17	▼ -16.0
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	8/3	41.01 ▼ -0.59	▼ -13.7
	原油CIF単価 (\$/bbl)	7月上旬	30.06 ▲ 4.36	▼ -37.26
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	20,236 ▲ 2,850	▼ -25,495
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	107.02 ▲ 0.55	▲ 0.97
	外国為替TTSレート (¥/\$)	8/3	107.13 ▼ -0.31	▲ 0.22



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/26 ~ 8/1	779 ▼ -80	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	773 ▼ -110	▼ -	
	輸出	"	15 ▼ -37	▼ -	
	在庫	8/1	1,661 ▼ -8	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/28 ~ 8/3	42.9 ▲ 1.5	▼ -15.9	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/28 ~ 8/3	41.0 ▲ 0.2	▼ -14.4
		(TOCOM/中部)	8/3	42.0 ▲ 0.3	▼ -12.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/3	134.5 ▲ 2.2	▼ -11.0	

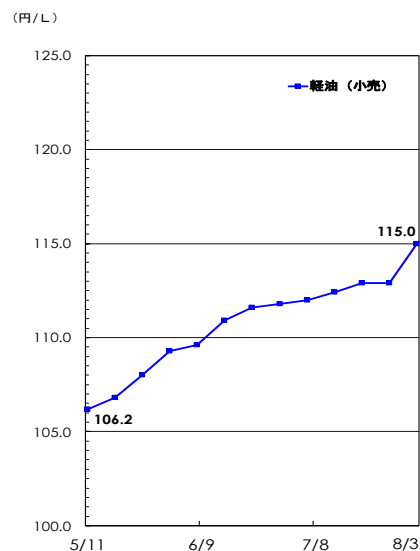
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

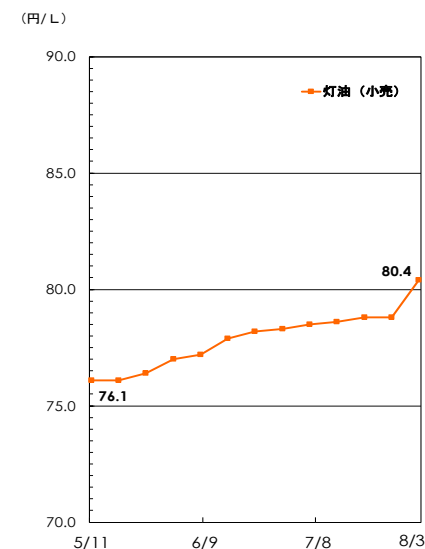
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/26 ~ 8/1	534 ▼ -82	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	553 ▲ 69	▼ -	
	輸出	"	6 ▼ -113	▼ -	
	在庫	8/1	1,621 ▼ -25	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/28 ~ 8/3	45.6 ▲ 2.4	▼ -16.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/28 ~ 8/3	47.2 ▼ -0.1	▼ -15.7
		(TOCOM/中部)	8/3	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/3	115.0 ▲ 2.1	▼ -11.6	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/26 ~ 8/1	168 ➡ 0	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	165 ▲ 64	▲ -	
	輸出	"	50 ▲ 50	▲ -	
	在庫	8/1	1,877 ▼ -47	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/28 ~ 8/3	46.0 ▲ 2.9	▼ -14.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/28 ~ 8/3	42.9 ▲ 0.3	▼ -15.3
		(TOCOM/中部)	8/3	45.0 ▲ 1.0	▼ -13.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	8/3	80.4 ▲ 1.6	▼ -10.7	



■ 関連情報

1 海外/原油

8月5日のNYMEXのWTI先物原油は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、前週末の原油在庫が前週末比740万バレル減少と市場予想(300万バレル減)を大幅に上回る取り崩しとなり、需要の堅調さから、4営業日続伸した。また、この日発表の米国の非製造業景況感指数の回復、外国為替市場のドル安に伴う原油先物の割安感、原油先物同様にリスク商品である米国株価の上昇も支援要因となった。ただ、米国内の新型コロナ再感染拡大の懸念が上値を抑えた。9月限の終値は前日比0.49ドル高の42.19ドル、10月限の終値は同0.52ドル高の42.43ドル。

EIAによると、8月3日時点のガソリンの小売価格は、前週比0.1セント値上がりの1ガロン2.176ドル(61.5円/ℓ)、ディーゼルは同0.3セント値下がりの2.424ドル(68.5円/ℓ)となった。ガソリンは3週ぶりの値上がり、ディーゼルは3週連続の値下がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年7月26日～8月1日に休止したトッパー能力は84.4万バレル/日で、前週に対して16.5万バレル/日増加した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は226.0万klと、前週に比べ9.7万kl減少。前年に対しては116.9万klの減少。トッパー稼働率は57.7%と前週に対して2.5ポイントの減少、前年に対しては29.9ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてジェット、A重油が増産となり、その他の油種で減産となった。ガソリン/9.3%減、ジェット/45.6%増、灯油/0.1%減、軽油/13.4%減、A重油/33.4%増、C重油/14.3%減。今週のC重油の輸入は3.8万kl(前週比1.8万kl増)。軽油の輸出は0.6万kl(前週比11.3万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でガソリン、ジェットが減少となり、その他の油種で増加となった。前年比では灯油、A重油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は77.3万kl(対前週12.5%減)と2週振りで減少となり、50週連続で100万klを下回った。ジェット9.6万kl(対前週7.5%減)、灯油16.5万kl(対前週63.7%増)、軽油55.3万kl(対前週14.2%増)、A重油22.2万kl(対前週48.7%増)、C重

油15.2万kl(対前週16.4%増)。

(単位: 千kl)

	今週 (7/26 ~ 8/1)	前週 (7/19 ~ 7/25)	前週比
ガソリン	773	883	▼ -110 (-12%)
ジェット燃料	96	103	▼ -7 (-7%)
灯油	165	101	▲ 64 (63%)
軽油	553	484	▲ 69 (14%)
A重油	222	150	▲ 72 (48%)
C重油	152	130	▲ 22 (17%)
合計	1,961	1,851	▲ 110 (6%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

8月1日時点の在庫は、ジェットで積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった前年に対してはガソリン、灯油、軽油が増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンは166.1万kl、前週差0.8万kl減。前年に対しては9.3万kl多い。

灯油は187.7万kl、前週差4.7万kl減。前年に対しては0.1万kl多い。

軽油は162.1万kl、前週差2.5万kl減。前年に対しては15.2万kl多い。

A重油は69.4万kl、前週差4.8万kl減。前年に対しては0.6万kl少ない。

C重油は183.7万kl、前週差10.9万kl減。前年に対しては6.4万kl少ない。

(単位: 千kl)

	今週 (8/1)	前週 (7/25)	前週比
ガソリン	1,661	1,669	▼ -8 (-0%)
ジェット燃料	704	703	▲ 1 (0%)
灯油	1,877	1,924	▼ -47 (-2%)
軽油	1,621	1,646	▼ -25 (-2%)
A重油	694	742	▼ -48 (-6%)
C重油	1,837	1,946	▼ -109 (-6%)
合計	8,394	8,630	▼ -236 (-2.7%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月28日～8月3日の原油価格は前週比でやや値下がりし、為替レートは円高で、円建ての原油コストは値下がりであったと見られる。

これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに全社、前週比1.0円引き下げた。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月28日～8月3日の製品スポット市況は、7月21日～27日平均と比べ、軽油先物取引のわずかな値下がりを除いて、他の取引・油種で値上がりとなった。

直近(7/28～8/3)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは1.5円の値上がり、灯油は2.9円の値上がり、軽油は2.4円の値上がりだった。直近(7/28～8/3)において、ガソリンは95～98円台で大きく値上がり後わずかに値下がり、灯油は43～47円台で大きく値上がり、軽油は43～47円台で大きく値上がり後わずかに値下がりして推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、同期間、前週比で、ガソリンは2.8円の値上がり、灯油は1.9円の値上がり、軽油は3.2円の値上がりだった。海上スポット価格は、同期間に、ガソリンは97～100円台で大きく値上がり後ほぼ横ばい、灯油は42円台で出入り後わずかに値上がり、軽油は49～50円台でわずかに値下がりして推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは0.2円の値上がり、灯油は0.3円の値上がり、軽油は0.1円の値下がりだった。先物価格は、同期間に、ガソリン94～95円台で出入り後値下がり、灯油42～43円台で値下がり、軽油46～47円台で出入り後値下がりして推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

(陸上ローリー 4地区平均)	今週 (7/28～8/3)	前週 (7/21～7/27)	前週比
レギュラー	42.9	41.4	▲ 1.5
灯油	46.0	43.1	▲ 2.9
軽油	45.6	43.2	▲ 2.4

(TOCOM) (単位: 円/%)

(期近物/終値) [平均]	今週 (7/28～8/3)	前週 (7/21～7/27)	前週比
レギュラー	41.0	40.8	▲ 0.2
灯油	42.9	42.6	▲ 0.3
軽油	47.2	47.3	▼ -0.1

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/28～8/3実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 1.5	▲ 0.2	▲ 0.9
灯油	▲ 2.9	▲ 0.3	▲ 1.6
軽油	▲ 2.4	▼ -0.1	▲ 1.1
A重油	▲ 2.2		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

8月3日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比2.2円高の134.5円、軽油は同2.1円高の115.0円、灯油は18%ベースで同28円高の1,447円(1%ベースでは同1.6円高の80.4円)。ガソリンは12週連続の値上がり、軽油は2週ぶりの値上がり、灯油も2週ぶりの値上がりとなった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは43都道府県、横ばいは2県、値下がりが2県となった。全国最安値は徳島県の126.5円(同1.7円高)、その次に安いのが香川県の128.2円(同0.6円高)、最高値は長野県の144.0円(同2.6円高)。最も値上がりしたのは、同4.8円高の富山県(138.4

円)、横ばいは沖縄県・滋賀県、最も値下がりしたのは、同0.2円安の長崎県(142.9円)と兵庫県(129.9円)だった。

先週の指標原油の円建てコストはほぼ横ばいであったが、今週適用の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油とも、全社4.0円の値上げとなった。今週は、原油価格はやや値下がりし、為替レートは円高で、円建ての原油コストは値下がりしたと見られる。次週適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社1.0円の引き下げとなった。次回調査時(8月11日)のガソリンの小売価格は、前週の卸価格値上げの転嫁が続くと考えられることから、小幅な値上がりが予想される。

(資工庁公表) (単位: 円/%)

[週動向]	今週 (8/3)	前週 (7/27)	前週比	直近高値
レギュラー	134.5	132.3	▲ 2.2	08/8/4 185.1
灯油	80.4	78.8	▲ 1.6	08/8/11 132.1
軽油	115.0	112.9	▲ 2.1	08/8/4 167.4

小売価格

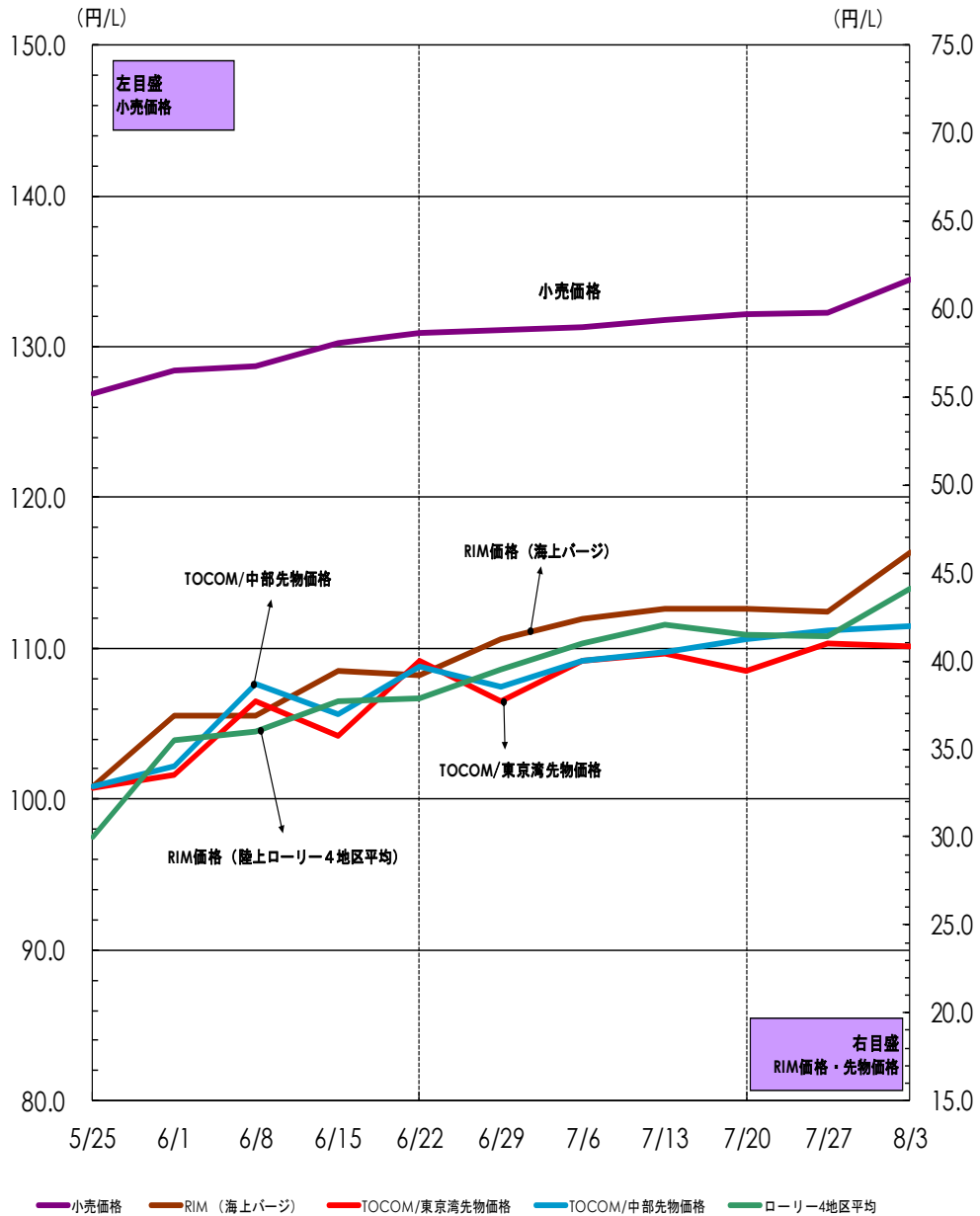
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2020/5/25 ~ 2020/8/3)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2020第8号)の公表は、8/21(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。